

最優秀賞

ヒメボタルの約束

明治学園小学校 5年 野入 桃子

待ちに待った日がやってきた。わくわくした気持ちが止まらない。「ホタルを見に行こう。」

友達と約束したのは十日前。待つのは嫌いじゃない。その日が来るまでドキドキして、いやなことも頑張ることが出来るから。

「ゆかたを着て行こうよ。」

話している時間も楽しい。イベントは、すでに始まっていたのかもしれない。

お気に入りの蝶のゆかたを着て出かける。遠くに、ゆらゆらと動く光の粒を見つけた。

「あれ、ホタルじゃない？」

川に近づくにつれてホタルは一匹、二匹と増えてゆく。うれしくなつて私は走る。友達も走る。下駄が片方脱げて笑い合った。

光つては消えて、消えては光るホタルが美しい。

「捕えたよ。」

宝物を守るように丸めて合わせた友達の手の中で、ホタルは何度も輝いた。道ばたに小さなホタルを一匹見つけた。飛んで逃げない。

「弱つて死にかけているのかな。」

小さなホタルを手のひらにそつとのせる。

「お願い、死なないで。この自然がずっと続きますように。」

私は心から願った。大丈夫。ホタルが放つ明るく強い光が、そう返事をしているみたい。

後で調べてみると、それは「ヒメボタル」という種類だった。主に陸地に生息し、メスは飛ぶことができないそうだ。死にかけていたのではなくて本当に良かった。

好きなこと、将来の夢。一面のホタルを見ながら、私は友達とたくさん話をした。いつか私たちが大人になった時、今日のことを思い出してなつかしむ日がきつと来るだろう。

「また一緒に見に来ようね。」

約束。指切りでつながった二人の小指を、ヒメボタルが光りながら歩いて行つた。

この美しい自然を守つて生きてゆきたい。私の願いだ。ヒメボタルのように、たとえ飛べなくとも、堂々と強く生きてゆきたい。

（審査評）

友達と一緒に見に行つたホタルの思い出が美しい。緑の風景や浴衣の色、暗くなる空、その中で光る黄色など、カラフルな情景が視覚的に浮かんでくる。楽しみだつたドキドキや、友達の約束をきっかけに深まる友情と、未来を見つめる感情の描写も鮮やかに表現されており、文章に立体感が醸成されている。

小学校五年生でできた大切な思い出と少しずつ成長していく自我の芽生えと、いきいきとした感情を忘れずに成長していただきたい。

佐藤 暁哉